それによって、自分の「内なる世界」の中に、なんらかの思うところ、感じるところがあれば、その教育は、少なくとも、その本人にとって、意味があるのである。近年、大学で高等教育を受けた人間の「内なる世界」が、どんどん小さく、また、どんどん貧しくなっているような気がする。それが、数々の局面での、判断力の低下や、モラル・ハザードにつながり、また、普段の仕事が、自分の心根の外にあるがために、悩む個人が増える一因にもなっているのではないだろうか。

野に咲く花

昨今、過度な成果主義の弊害が各所で露呈している。世の脚光を浴びることを、ことさらに重要視する、こんな世の中を見せつけられるたびに、ノコギリストは、誰からも愛でられず、人知れず野山に咲く、美しい花のことを想ってしまう。

もとより、「人知れず」とは、人間の勝手な言いぐさである。どんな植物でも、野生植物は、生態系の一員として、仲間と一緒に生きている。人間から見て、美しい花であれ、見栄えのしない花であれ、虫を引き寄せ、蜜を与え、自らは受粉して、果実をつける。その果実は、落ちて子孫を残す。あるものは食べられ、ほかの生物をやしなう。人に愛でられようが、愛でられまいが、その花の目的と役割を果たしている。

そもそも、その花をもてはやしているのは、その花とは無関係の人達である。その花のいのちのいとなみとは無関係の、生態系の外にいる人達である。無関係どころか、ときには、その花を踏み荒らしたり、根こそぎ持ち去ったりさえする。

科学の成果も同じことである。その成果に脚光を浴びせているのは、その成果を育んだ土壌とは無関係のよそ者である。マスコミは、話題性を重要視し、その成果の有用性をことさらに強調し、また、社会の興味を引くような報道をする。それが世の称賛とともに、羨望をよび、ついには、おとしいれにまで発展する。その陰には、経済的利益、名声、組織の都合など、多かれ少なかれ、それを利用しようという、目論見が見え隠れする。このような世の中に流されて、科学者自身やその組織でさえも、真理の探究という科学の本来

の姿を忘れ、名声やさらなる予算の獲得のため、その成果をことさらに世にアピールするようになった。

よそ者は、花実という成果だけが、その価値と思うかも知れないが、土があり、その中に住むバクテリアや小動物がいて、その土に根を張り、茎があり、葉があっての花実である。それらのあいだには優劣はない。目立つものだけが大切なわけではない。科学の外側にあって、成果だけを利用しようという人や組織は、人間の都合で、花実だけをもてはやす人々と同じである。

我が家の庭には、自然に生えてきたヤマユリが、毎年夏になると、方々で美しい花をつける。今年も見頃になってきたある朝、その花のほとんどが、なくなっていた。夜の間に、何者かに食べられてしまったらしい。食べられた花の場所や高さから考えると、それはどうもカモシカの仕業らしい。球根が人間の食用になるくらいだから、花もカモシカにとっては御馳走なのだろう。

お蔭で、毎年楽しみにしている花を、今年は見ることができなくなってしまった。ヤマユリにしても、花を咲かせ、種をつくり、それをまき散らして、子孫を残すことはできな

かった。これが人間だったら、花が咲かなければ、何にもならないと思うかも知れないが、花を食べられたヤマユリは、何事もなかったかのように、葉は太陽の光を吸収し、地下の球根に栄養を蓄え、来年に備えていた。みずからのいとなみは、花を咲かせることだけではない。カモシカにしても、花を育てている人にとっては害獣であっても、それは生態系の一員であり、花を食べることも、自然の摂理の一つである。

中程の自由自在

いつか、田舎で、ばあちゃんに、『今年は天候が不順で心配ですね』と言ったら、『そんなこと、いちいち考えてたら、百姓なんてやってられないさ』、と言われた。

この秋は　雨か嵐か知らねども